

平成27年度第2回南国市行政計画審議会 議事録 <第一部>	
日時	平成27年6月2日(火曜日) 13:30~14:50
会場	南国市役所 4階大会議室
出席者	別紙名簿参照(委員30名中、24名参加)
議題	【第一部】南国市総合計画 (1) 第4次南国市総合計画・基本構想(案)について (2) その他
配布資料	《南国市総合計画資料》 【資料1】第4次南国市総合計画・基本構想(素案)
その他	審議委員の交代について 第1回審議会欠席委員と交代した審議委員より自己紹介
会議の内容	<p>【第一部】南国市総合計画</p> <p>(会長) 冒頭で二つ申し上げておきたい。一つは国の動きだが、先週5月27日に内閣官房で石破大臣が招集され、移住に関する国民会議に委員として、全国から二十数名が招集をされた。高知県からは、私を含め2人が招集をされ、四国では、徳島から神山町と祖谷から選ばれた。この移住の国民会議がどの様に活動していくかは、これからだが、その最後の挨拶で石破大臣から、今後、総合戦略や、人口ビジョンを策定する各自治体に対し、自分たちで考えてやりなさいという話があった。もう一つが、産、官、学、金、労、言、これは、産業界、行政、高等教育機関、金融機関、そして労働組合、労働機関と、メディアというこの全ての関わりのある方々で、ご当地で言うと、市民全員が議論をし、意欲的な人口ビジョン、総合戦略に仕上げることのメッセージを伝えてほしいということがあった。もう一点は地方創生に向けて、物事の考え方、視点が様々提案されているが、ローカルアイデンティティという言葉がよく挙げられている。地域らしさあるいは、地域の誇りと読み替えると良い。このローカルアイデンティティをどのように大きくしていくかが、ポイントになる。そのポイントを実際に企画し、立案をしていくという意味においては、希望活動人口の向上ということにかかっている。希望活動人口とは、地域の将来に、希望があると公言し、その実現に向け、行動している人たちのことを指すそうだ。希望活動人口が、各地域でどれくらいの比率に高まっていくか、これが求められているのではないかと、という論調だった。南国市において、5万人の人口のうち、例えば50%が希望活動人口にあたるとすると、2万5千人になる。例えば、1千万人の人口がいる地域においても、仮に希望活動人口が0.1%であるとすると、1万人に過ぎないというような形になってくる。実質的に地域のことを積極的に、希望を元に描いていける人を増やしてい</p>

く。そのためには、産、官、学、金、労、言が将来のことを議論していく。この裾野を広げていくことが、重要ではないかと考える。2060年を設定しているが、将来の南国市、これがどうあるべきか、という点に関して、忌憚のないご意見をさらに創造的にご発言いただきたい。

(事務局) 委員交代についてアナウンス

(交代委員、前回欠席委員) 挨拶

(事務局) 配布資料と本日の議事進行の次第についての説明

(会長) (1) 第4次南国市総合計画の基本構想案について、事務局よりご説明お願いいたします。

(事務局) (1) 資料1により第4次南国市総合計画の基本構想案の説明

(会長) これから委員の皆様からご質問やご意見をいただきたい。基本構想の中に計画策定の背景として、特性、資源という説明があったが、強みや弱み、SWOT分析などと言うが、そのうちの強みにあたる部分を羅列されていると思う。他と比べて差別化できるかという点に非常に関心がある。そういう目で見ると、ここの特性というのは、南国市さんは相当恵まれていると相対的な印象としてある。こういうところはまず思いっきり伸ばしていかないといけない。また、当初目標にしていた人口の減少に歯止めをかけようとしたが、現実にはそうになっていない。これまでの基本計画をどういうふうに振り返るかということも一つポイントになるが、従前の政策の延長線上で考えると、社人研が予想している人口の減少に歯止めをかけることは難しいという事実が突きつけられている。こういう点もお含みいただき、活発なご意見を賜りたい。

(委員) 先ほど会長から人口問題ということが言われたが、南国市として、増田レポートというか、減るといのがわかっているようにみているが、交通や安心の南国市。あるいは食育の町というような観点から見て、南国市のポテンシャルは高い。ただ、人口が減るという捉え方から一步脱皮し、高知市のベッドタウンとして人口を増やすためにはどうするか。高知市の地価の高いところで住宅を建てるより、南国市が自前で4世代くらいの人が入って住める住宅を低家賃で、供給していく。人口問題を希望の持てる、人口の増加へ結びつけていける南国市の構築を、考えていかななくてはならない。

(会長) 住居環境をどのように整備して行くか、こういったところにまず、ご意見を賜った。その点は前回からの継続であり、また今後、第二部において結論に近づけていかないといけない問題なので、まず念頭においてこれから、更に話を進めていきたい。

(委員) 人口問題は空き家を利用して解決を図ろうとするのは無理があると思う。空き家の活用は古い木造の住宅が多いことから、地震に耐えられ

ないのではないかと思います。南国市は恵まれているので、住宅地を造成して、若い方、外からの方を入れるのが大事だと思う。そうしたら人口問題も解決する。前にも言ったが、小学校の児童数が以前の半分になり、やはり、小学校単位で考えていかないといけない。しかし、市街化調整区域に入っているから難しいということは当然ある。ただ、特区申請をすれば、緩やかに解決できると思う。また集落の中には市街化調整区域の中では医大周辺など、大規模指定集落などは開発できるような要件があるので、それを利用すべきではないかと思う。ただ、空き家を利用するのは怖いと思う。

(会長) 人口減を食い止めるために域外から人を呼び込み、その住居環境を空き家対策の一環ではなく、新築を含め造成をするべきで、それが、都市計画や、そういった縛りとどのように兼ね合いをつけるかということだが、地区計画や色々な縛りがあるが、市街化調整区域の整備に関しては規制緩和も含め、総合的に考えていくという案もあるのではないか。具体的には高知大学医学部付属病院周辺というのも挙げていただいたが、これについても、ぜひ事務局で記録しておいてほしい。

(委員) 27 ページに「住んでみたい、住んでよかった南国市」という言葉が出てくるが、これを見て、住んでみたいというのは誰が、どういう世代が住んでみたい南国市なのか。そして、住んでよかったのは、どういう人たちが住んでよかったのか。そこのところをもう少し絞っていききたい。

(会長) これは作った方に思いを聞いてみようと思う。

(事務局) 住んでみたいというのは、移住を含め新興住宅もあるが、やはり南国市の魅力を十分発揮し、全国誰もが住んでみたいと思えるような町にしていきたい。そして、住んでよかったとは、そう思っただけのような施策の展開を図り、現在お住まいの南国市民の皆さんにも住んでよかったと思っただけ、あるいは、移住で入って定住してこられた皆さんにも住んでよかったと思っただけのような、そんな思いを込めたものである。

(会長) 納得していただけたか。ピンと来なければ、共感が持てないので、そういうふうにしてほしいという思いを市民が共有できないと思う。したがって、もしこれに替わるような案があれば、もっと積極的に意見をいただきたい。

(事務局) やはり、基本の理念になるので、積極的にご意見いただきたい。

(会長) 思いはご紹介いただいた通りだ、どう表現するか、というのは大変大事なことになるので、ぜひアイデアを出していただきたい。

(委員) 13 ページの人口の問題は人がいなくてはどうにもならないということである。特に行政は人が減ってくると住民税などの税収も減ってくることになる。65 歳以上の人口は増えているので、極端には減らないと思う

が、一番年少の15歳のところが非常に低い。若い夫婦が一人で1.2から1.4くらいが平均になる。これは若い夫婦に頑張ってもらわなくてはならない。ある行政では出会いの場の提供を非常に熱心にやっているが、出会い、結婚、出生率を上げていくこと以外はどのような方法もない。行政のほうで婚活パーティーみたいなものを定期的に行うというのはどうか。とにかく子供が生まれてこないことにはどのような方法もない。結婚はしたが、子供は作らないという夫婦が大変多い。土佐・南国は、お酒を飲む女性も多くなっているが、お酒による離婚率も高いと思う。結婚をさせたら、別れさせない。結婚をしたら子供を作らせる、ということを実践的にやっていかないとなかなか難しい問題ではないか。

(会長) 年少人口をいかに増やしていくか、子育て環境の充実が、さらに人口増になっていく、非常に重要なところをご指摘いただいた。

(委員) 人口の問題が出ているが、以前アンケート結果で、満足度が高いところが一般に言われる不便な地域。若干、満足度が低かったところが岡豊、十市と覚えている。古くから長く住んでいると比較的満足。しかし、新しく定住してきた人たちには今一魅力がないのではないかと解釈される。その辺の分析が必要。また、仕事があっても住む住居がない。そして、もう一つが、働き甲斐があることだと思う。ただ就職できればいいと言う若い人はあまりなく、こういうところで働きたいからここに住むと思うので、魅力ある働く場所の確保や創設も踏まえ、人口問題、定住対策を考えていったらどうか。

(会長) 人口ビジョンを考える上で、市民ニーズというのが参考の一つとして挙げられている、もう少し踏み込んだ調査と、分析がいるのではないかという話だった。あわせて、県のほうで意向調査を今月から来月にかけて実施すると訊いているが、県の意向を紹介していただけないか。そして今の委員から発言のあったことが、その中に盛り込まれているかどうかに関してもコメントをお願いしたい。

(委員) 県内の学生及び県外の高知出身の学生に対してアンケート調査を実施する。内容は、どういった職種に就きたいか、就職希望に関するアンケート。こういったことを踏まえて、今後、人口ビジョンなり、総合戦略に活かしていこうということ。学生の中には自ら仕事を起こしたいと思う方もおられるのではないかとということで、創業に関するアンケートも合わせてやるということで予定しており、県も連携をとっていきたいと思っている。

(会長) 県のほうで広範なアンケート調査を実施するというので、県内の学生を含めた若い人たち、県外に移っている本県出身者にも情報を集めていくように要請があったようだ。これに関し、属性などもかなり細かく

アンケートをするので、その一部は南国市さんに関係する情報が入ってくることになる。それは県との間でやり取りをするということで良いか？（はい。）今のご意見の参考にさせていただきたいと思う。

（委員） 大学の学生などは県外出身者が8割くらいで、大学に入ったときからすでに「地元に戻って就職をする」というのが念頭にある。その中でいかに高知県、特に南国市というところに興味を持ってもらうことが必要になってくる。私が所属する農学部でも、農学部の中での活動や勉強が学部内でしか行われてなく、南国市とのつながりが無い。南国市にもっと関心を持ってもらうには、南国市で学生たちが関わっていけるような仕組みや機会が必要だと思う。高知大学では地域協働というのを念頭においてかなり推進しているので、すごくいい機会だと思っている。南国市の地域住民の方々と一緒になって何か学べるような機会があれば、もっと学生が関心を持ち、考えられる機会が増えると思う。

（会長） 補足をすると、1つの強みとして、高知大学農学部があるが、来年度から農学部は農学海洋学部へ改組される。海洋が一つの目玉になり、海洋コアセンターと教育と研究が一体化していく。日本の海洋教育のメッカがこの南国市にできる。こんな強みのあるところはない。本学においては地域協働ということで、地域における中核となる人材を育成していこうとする活動も学部教育で展開している。住むのに魅力的であり、仕事も見つかるし、つくれるというふうになってくると、非常に強みはあるのではないかと考えている。大学のことにしても一つの大きな特徴として大きく取り上げていただければと思う。

（委員） 南国市の特性・資源の中で県都高知市の隣にあるということが抜けている。県都高知市の隣にあることをもっと前に出して、強みとして生かさない、今後の南国市の生きる道はないと思う。南国市さんが高知県においてどういうスタンスの市にしたいかということが、この中には謳われているのか。基本構想の住んでみたい、住んでよかった南国市というところが高知県の中において南国市のあるべき姿がこういうものです、ということを行っているのではないかと考えるが、その辺が明確になっていない。南国市は高知市のベッドタウンという表現をされたが、ベッドタウンになっていたら、もっと人口が増えていてもおかしくない。そのためにはどうしたらいいのか。若い人が当然増えなくてはいけない。若い人が増えるということは、南国市は教育に特徴があると出ていたが、教育、学びの町と呼べるのか。南国市が幼稚園、小学校、中学校一貫の教育をやるといえば、若い人は何か魅力を感じ、南国に住んだら自分の子供たちの教育は任せられるかもしれないというようになる。このようなことをしていかないと、住んでみたい、住んでよかったとはならない。

(会長) 高知市の隣にあるということで、県においての南国市の位置づけや存在自体をどうイメージするのか。ベッドタウンという言葉があったが、昼間夜間人口をどう考えるか。さらにはポイントとして幼児教育から高校までの教育のあり方が、差別化の要因になっていくのではないかという新しい話があった。各地域での競争、コンペティション、県全体の競争、あるいは、共に作る競争もあるが、そういう意味での果たすべき南国市の役割もある。ここまでしっかり考えていくべきだ、という発言だった。

(委員) 人口の増加の観点での意見。南国市の小中学校の校区に小規模だが、団地を作るという構想。私は久礼田地区に住んでおり、オフィスパークができて20年くらいになるが、社宅のスペースを作ってほしいと言っても市街化調整区域ということで、制約がかかってできない。しかし、小・中学校の校区に小規模の植田団地のように、50戸くらいで地区も活性化し、子供たちが多くなった経緯もある。制約が都市計画法、ほ場整備の関係などがあるが、小学校の校区に50戸くらいなら何とか土地も確保できるので、団地をつくる。それができれば、若年女性の人口も増え、年少人口の増加にもつながると思う。小規模な植田団地のような形で、小・中学校校区に50戸程度のようなものを作っていく。大篠小学校のほうはマンモスになっているので、別の考えを持たなければいけないと思う。

(会長) 住居の問題と都市計画、市街化調整区域の限界というの踏まえて、住居をどう新しく造成してゆくか、各中学、小学校区への50戸程度の団地の造成というような具体的なご提案をいただいた。教育問題と重ねていけば、魅力的な学区や校区というところから、人を呼び込んでくるということも当然考えられる。

(委員) 本資料の20ページのところの、まちづくりの基本理念、将来像だが、少し将来像の方が抽象的なイメージではないか。将来像が住んでみたい、住んでよかった南国市はいいかもしれない。理念の方を、人を守るなどにしたほうが良い。上の理念が将来像的に見えてしまい、下が抽象的になっているイメージがある。基本目標の中で、交通の要衝の利点を活かしたという記述が抜けている。また、根本的な都市計画についてだが、安全・安心のまちの部分で、将来にわたり、沿岸部は津波で襲われる可能性があるが、一步踏み込んだ対策が必要ではないか。新しく家を建てるときに津波の来ないところへ建て替わっていくような内容を盛り込んだ部分があってもよい。今、沿岸部には新しく家を建てる方もいるかもしれない。津波でやられることはわかっているが、一方で新しい方は安全だと思っている。

(会長) 基本理念と将来像は各委員もしっくりきていない。階層的に見ると逆では、ということも含め、事務局に捉えていただきたい。2つ目は相

当大きな問題だが、この後の話は45年後まで視野に入れ、都市計画マスタープランでより大きなランドデザイン、まちづくりでやっていく視点が必要になってくる。市全体のゾーニングをどう考え、そこに至るまでの5年、10年のロードマップをどのようにするか、学区ごとにおける住居の整備や都市計画の見直しといった話にも関連してくるのではと思う。基本構想に関わる部分で、抜け落ちているところなどは積極的に事務局にお寄せいただきたい。

(委員) 高知大学の学生さんは地元に戻る人が多いとあったが、植田団地ができ、久礼田小学校が潤ったという話があった。その団地で住まわれている方と交流したら、高知大学の出身の方で、県外からきて、南国市が気に入って移住したという方が何家族もいらした。そういった、小学校、中学校の近くに、団地ができれば、高知大出身の県外の方の受け皿になるのではと感じた。住んでみたいというところのアピールだが、最近、取材やテレビで南国市の西島園芸団地であったり、シャモ鍋であったりとか、全国区でここ数年流れている。県外の方にアピールをし、来てみたい、住んでみたいと思わせるようなコンセプトをこの中にもう少し盛り込まないと、人口増、子供を増やすだけではなかなか厳しく、移住者を増やすということも取り入れてもらいたい。

(会長) 子育て環境も含めて、若者の定住をいかに生み出していくかということと、TV番組で取り上げられて、今、南国市の注目度は相当上がっていて、あのような形で打ち出していくというのは、やはりコンセプトが大事だということ。住んでみたい、住んで良かったなどのキャッチコピーは、やはり地域内の方々に誇りを喚起する。地域外の方に対しては、魅力を訴求するということが大事だ。何か南国市を一言で表現できる町のタグラインをしっかりと訴えていき、県、高知市と比較し、南国市をみんなに表現できるようなツールになっていくのではないかと思う。

以上